様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：５１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０３３３

研究課題名（和文）ロバート・ヘリックの抒情詩における社会性と政治的機能

研究課題名（英文）The Social and Political Function in Robert Herrick's Lyric Poetry

研究代表者
古河　美喜子（FURUKAWA, Mikiko）

秋田工業高等専門学校・その他部局等・講師

研究者番号：８０４６２１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は平成20～21年度、平成22～23年度にかけて科学研究費補助金の若手研究(B)にて行われた研究課題「ロバート・ヘリックの理想郷と動乱のイギリス社会」及び「ロバート・ヘリックの田園世界―『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性―」を基底とするものである。研究を進める中、当時の言論統制・検閲といった時代背景と「詩」というジャンルの表現上の特殊性から「抒情性」と「社会性」という一見相反する二つの概念がヘリック詩の中で密接に融合していることが解ってきた。こうした知見をもとに、王党派詩人ヘリックが描いた理想郷『ヘスペリディーズ』中でのピューリタン批判、抒情詩集が持つ社会性や政治的機能を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research is based on my research projects (Grants-in-Aid for Scientific Research, 2008-2009:“Robert Herrick’s Hesperides and Social Turmoil in Seventeenth-Century England”and 2010-2011:“Robert Herrick’s Idyllic World: Lyricism and Social Criticism in Hesperides”). As my research has progressed, a topic requiring further examination has emerged. While “lyricism” and “the social” may appear to contradict each other, when set against the historical background of censorship, restrictions on the freedom of speech, and the fact that “poetry” as a genre uses particular techniques such as metaphors and euphemism, these two concepts are, in fact, inextricably entwined. In my analysis, I focused on the social and political aspects of Herrick’s literary criticism of Puritanism and Puritan society in Hesperides which overlaps the poet’s Utopia.

研究分野：人文学

キーワード：17世紀　イギリス　詩　王党派　ロバート・ヘリック

１．研究開始当初の背景

本研究は平成 20～21 年度及び平成 22～23 年度にかけて科学研究費補助金の若手研究(B)にて採択され行われた研究課題「ロバート・ヘリックの理想郷と動乱のイギリス社会」並びに「ロバート・ヘリックの田園世界―『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性―」を基底とするものである。そこで得られた知見をもとに、17 世紀イギリスの王党派詩人ロバート・ヘリック(Robert Herrick, 1591-1674) が描いた理想郷的世界と、対峙するピューリタン社会との関係性、詩人のピューリタニズム批判の言説を通し、最終的には抒情詩集『ヘスペリディーズ』（*Hesperides*, 1648）が持つ社会性や王党派の政治的プロパガンダとしての機能を明らかにしたいと考えた。

平成 20～21 年度課題において、二年間にわたり計画された研究課題を進めるうち、ヘリックの場合、一見相反するように見える「抒情性」と「社会性」は言論統制・検閲といった当時の時代背景や「詩」というジャンルが持つ隠喩・婉曲表現といった特殊性から実は分ち難く結びついているという新たな検討課題が浮かび上がってきた。こうした抒情性と社会性の融合の問題に関しては、平成 22～23 年度にかけての採択課題において、継続的に美学と政治学という観点からの考察も含めて、芸術や哲学にまで及ぶ領域である美学に関する資料の収集や文献の整理など基礎研究を重ねつつ検討が進められた。

２．研究の目的

前述したように、本研究は科研費採択課題二件で四年間にわたり続けてきた取り組みをもとに、17 世紀イギリスの王党派の思想、とくにロバート・ヘリックの抒情詩集における社会性や政治的機能について考察を深め、その成果を纏めるというものである。

マーカス(Leah S. Marcus)やスワン(Marjorie Swann)の先行研究に加え、近年の研究動向として、ピュー(Syrithe Pugh)が『ヘスペリディーズ』と同年に出版されたリチャード・ファンショー(Richard Fanshawe, 1608-1666）の著作との「間テクスト性」から政治的読解(*Herrick, Fanshawe and the Politics of Intertextuality: Classical Literature and Seventeenth-Century Royalism*, 2010)を展開しており、こうした動きにも着目しながら考察を進めることを目的とした。

３．研究の方法

これまで行ってきた研究課題「ロバート・ヘリックの理想郷と動乱のイギリス社会」並びに「ロバート・ヘリックの田園世界―『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性―」における成果をもとに、ヘリック詩集の政治性を探るため、研究の柱として掲げてきた二つの柱、第一に「田園生活に隠された政治性」、第二に「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」を軸として成果論考の章立て及び各論を推敲した。構成としては、六つの章を設け、その中に複数の題材・テーマを設定した上で、理論的な強化を図りながら研究計画を立てた。最新の研究動向を参照しながら、予定していた章立て・題材に、随時修正や変更などを加えつつ、論文全体の構成をそれぞれの題材がより有機的な繋がりを持つように意識して練り上げ、細部の整合性などにも充分に配慮しながら作業を進めた。

第一章では、17 世紀の世相とイギリスの宗教対立について取り上げ、この詩人が生きた時代について整理する。ヘリックの宗教観を「真のレントを守ること」（‘To keep a true Lent’）に示される王党派詩人としての宗教的立場として明確にしながら、「すこしずつ、長く愛して」（‘Love me little, love me long’）に見られるギリシャ・ローマ時代への憧憬、中庸の思想とも併せて考察する。

第二章では、「コリナの花摘み」（‘Corinna’s going a *Maying*’）中で言及される『娯楽の書』(1618; 1633)に政治的読解を与えるマーカスの先行研究、歴史学者マーカムソン（Robert W. Malcolmson）の娯楽史などに基づき、ウェィクやクリスマスについてうたった詩群を分析する。ピューリタニズム批判から王党派の政治的な言説を拾い上げる。

第三章では、17 世紀に流行したサブ・ジャンル、ヘリックの所謂カントリー・ハウス・ポエムを取り扱う。ヒバード（G.R. Hibbard）、マクラン（W. A. McClung）によるカントリー・ハウス・ポエムにおける先行研究や議論に配慮しながら、「サー・ルイス・ペンバートンに捧げる讃えの歌」（‘A Panegerick to Sir Lewis Penberton’）、「最後の収穫車、或いは収穫の搬入、ライト・オナラブル・ミルドメイ、ウェストモアランド伯に」（‘The Hock-cart, or Harvest-home: To the Right Honourable, Mildmay, Earle of Westmorland’）、「パラニート調、友人ジョン・ウィクスのための忠告の歌」（‘A Paranaeticall, or Advisive Verse, to his friend, M. John Wicks’）、「田園の生活、敬愛するエンディミオン・ポーターに寄せて」（‘The Country life, to the honoured M. End. Porter’）を読む。

第四章では、「白い島、すなわち祝福されたものの国」（‘The white Island: or place of the Blest’）を中心に、同じ時代を生きた詩人アンドリュー・マーヴェル（Andrew Marvell, 1621-1678）の「バミューダ諸島」（‘Bermudas’）などとも比較検討しながら、ヘリックの楽園観について探る。資料としてはクルツィウス（Ernst Robert Curtius）の『ヨーロッパ文学とラテン中世』（*Europäische Literatur und Latinsches Mittelalter*, 1954）を用いる。

第五章では、ヘリックの民俗学的要素について、『ノーツ・アンド・クィアリーズ』（*Notes and Queries*）誌とヘリックの関わりを端緒

として論を提起する。『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌に登場する「妖精の神殿、オベロンの礼拝堂」の海老上膓（“*Lady of the Lobster*”）をめぐるヘリックの民俗学者的要素を、プリニウス（Gaius Plinius Secundus）の『博物誌』（*Naturalis Historia*）との結び付きにも触れながら検討し、そこに見出される彼の作品の広い意味での博物学的要素について取り上げる。ここでは「もうひとつの馬小屋用の呪文」（‘Another Charm for stables’）などの当時の迷信・俗信についてうたった詩群を取り扱い、適宜ブリッグズ（K. M. Briggs）の『迷信・俗信辞典』（*A Dictionary of Superstitions*, 1989）を参照する。

第六章では、ヘリックの妖精詩を取り上げる。彼の妖精詩はいわば 17 世紀の社会を妖精世界に見立ててミニチュア化して諷刺したところにその特徴があり、従来的な単なる抒情詩という枠組みでは片づけられないものとして認識する必要がある。妖精王オベロンの世界を描いた妖精詩三部作を中心にホーマー（Joan Ozark Holmer）やシュウェンガー（Peter Schwenger）などの先行研究・議論を踏まえると共に、ヘリック研究家でもあるドラットル（Floris Delattre）のイギリスにおける妖精神話に関する考察『妖精の世界』（*English Fairy Poetry: From the Origins to the Seventeenth Century*, 1912）、にも目を配る。ヘリックの妖精世界の特質である奇妙・珍奇・微細について、さらにヘリック独特の美学、当時の流行でもあった細密画的要素についても検討を加える。

４．研究成果

(1)平成 24 年度には、当初の計画通り、第一の柱「田園生活に隠された政治性」の枠組みの中から特に「カントリー・ハウス・ポエム」について取り上げ、7 月に十七世紀英文学会東北支部で発表(2012. 7.21)を行い、翌年 5 月に十七世紀英文学会全国大会で支部での発表内容に加筆修正を加えたものを発表(2013. 5.24)すると共にそれをもとにした論文「ヘリックのカントリー・ハウス・ポエム」（『十七世紀おける終わりと始まり』所収、2013. 5.30）を纏めた。

ヘリックの田園詩の特徴について、従来の伝統的テーマ（ラテン牧歌文学）や当時流行したカントリー・ハウス・ポエムというジャンルを踏まえながら、作品分析また先行研究を通して、ヘリックの田園趣味に隠された政治性に関し考察を加えた。

結論として、田舎の大邸宅を讃えるカントリー・ハウス・ポエムに顕著なように、ヘリックの田園詩においては、牧歌というよりも、農耕詩的要素が見られ、労働の意義を評価するという点で教訓的内容となっていることを指摘した。ヘリックの楽園の原型や象徴ともいえる理想世界即ち田園を描いたカントリー・ハウス・ポエムは、牧歌世界としての心地よい場所というより国王を中心とする階級の館であり、農耕詩的世界として展開されるものである。このことから、カントリー・ハウス・ポエムにおける政治的機能を、ヘリックの田園生活やその賛美の背後に確認することができると考えられる。

(2) 平成 25 年度には、当初の計画通り第二の柱の枠組みにおいて研究の進展を図ったが、7月に所属する日本比較文学会東北支部の[ワークショップ]『「ゴンドラの唄」の比較文学』(2013. 7.27)にパネリストとして参加し発表することで、ヘリックの得意とする「今日を楽しめ」（“carpe diem”）の詩想について日本で大正時代に流行した「ゴンドラの唄」の源流としてのヨーロッパの伝統という大きな視点で俯瞰し捉え直すことができた。尚、平成 26 年 3 月 1 日 日本比較文学会東北支部発行「日本比較文学会東北支部会報第 19 号」において、弘前大学・仁平政人氏により発表及びワークショップ全体の報告（3-4 頁）がなされている。

また11月には日本比較文学会 2013年度東北大会の[講演とワークショップ]『生誕 110 年・没後 80 年／小林多喜二の国際性』において研究発表(2013. 11.30)を行った。この発表要旨は、前掲の「日本比較文学会東北支部会報第 19 号」中に「ロバート・ヘリックに おける詩と社会問題」（6 頁）として纏められている。実際の発表（報告）では、タイトルを改め、「ロバート・ヘリックと小林多喜二—王党派詩人と革命作家の政治性と芸術性— 」と題して、小林多喜二（1903-1933）の「書かなければならない」というプロレタリア作家としての使命・決意・意識が時空を超えてイギリス 17 世紀の王党派詩人ロバート・ヘリックが担おうとした詩人として持つべき社会的役割や詩作態度とも結びつくという問題提起をもとに、内乱期のイギリスという時代との関わりを踏まえ「政治的でありつつ、美学的側面をテクスト中に併存させ文学作品としても成立させようとする」ヘリックと「共産主義者であり、しかし同時に作家であった」多喜二の作家としての姿勢に着目し、浜林正夫氏が『小林多喜二とその時代—極める眼—』（2004）中に挙げる「すべての人の生き方にかかわる問題」に向き合う「書く」という行為について比較考察を試みた。尚、このワークショップ報告については、先に述べた日本比較文学会の支部会報第 19 号中に秋田大学・山崎義光氏による印象記（7 頁）として掲載されている。

(3) 平成 26 年度には、日本英文学会東北支部第 69 回大会［シンポジウム］第一部門『オリジナルとアダプテーション』において、大会準備委員として企画立案及びシンポジウム準備をすると共に、本研究課題の柱として設定したテーマや題材に通底するヘリックの思想「今日を楽しめ」に関して司会兼パネリスト

として研究発表(2014. 11.30)を行った。
　発表（報告）では、ヘリックという詩人を中心に、ヨーロッパの伝統的な主題「今日を楽しめ」の詩想について、ヘリック詩「乙女たちに 時間を大事にするように」（‘To the Virgins, to make much of Time’）また その系譜を引く「ゴンドラの唄」と いうように、<ギリシャ・ローマ>、<イギリス 16-17 世紀>、<明治期～現代の日本>と時系列的にテーマがどのように現れ展開していくのかを概観した。
　ヘリックが範としたホラティウスからの受容を中心に、現代の映画作品『いまを生きる』に至るまで、詩作品・唄・映像作品という形で、音楽的要素とも密接に結びつきながら、新しい構造を取り入れつつ、本来保持する抒情的性質を多面的価値に変換・再生してゆくアダプテーションの様相を確かめた。

(4)平成 27 年度は、先ず前年度の研究実績である［シンポジウム］『オリジナルとアダプテーション』における研究発表「ヘリックと『カルペ・ディエム』の詩想」を 2015 年 9 月 15 日発行の『大会 Proceedings』において活字化した。
　また当初の計画に則り、第二の柱「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」中の妖精詩について以下の論文作成を行うと共に、ヘリック作品世界の中心となる「白い島」即ち理想のイングランド像を探る上で、「ヘリックの白い島 —理想化された楽園と現実化された楽園—」と題する研究発表(2016. 1.30)を十七世紀英文学会東北支部例会にて行った。
　ヘリックと影響関係のある作家の楽園観とを比較しながら浮かび上がってきたヘリックの楽園の捉え方は、本質的に現世で求められるものではなく来世でしか望めないものであるということであり、王党派的立場からすれば、ピューリタン革命による失権と復権の時代への期待という当時の社会情況の反映が窺える。事実、内乱勃発（1642）後、国王チャールズ一世の処刑（1649）の直前に出版された詩集『ヘスペリディーズ』（1648）に込められた詩人の願いは、続くクロムウェルの厳格な共和制政治から十余年の時を経て、後のイングランド王政復古によるチャールズ二世の復位、スチュアート朝の復活（1660）によって果たされることとなる。17 世紀イングランドという政治・宗教的に流動的な時代にあって、ヘリックもまた同時代の詩人マーヴェルのように、一種の囲われた世界の中に安定的で平穏な楽園を見出したといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①FURUKAWA, Mikiko, “The Fairy Poetry of Robert Herrick: Concerning his Miniaturistic Technique”、『秋田工業高等専門学校研究紀要』第 51 号、査読無、2016、53-58
http://akita-nct.jp/libra/report/51.html

②古河美喜子、「ヘリックと『カルペ・ディエム』の詩想」、日本英文学会『第 87 回大会 Proceedings: The 87th General Meeting of the English Literary Society of Japan（付 2014 年度支部大会 Proceedings）』、査読無、2015、122-23

③ FURUKAWA, Mikiko, “Herrick as a Natural Historian: Examination of word-of-mouth tradition and relationship with Kumagusu Minakata”、『秋田工業高等専門学校研究紀要』第 49 号、査読無、2014、85-89
http://akita-nct.jp/libra/report/49.html

〔学会発表〕（計　6　件）

①[研究発表]古河美喜子、「ヘリックの白い島 —理想化された楽園と現実化された楽園—」、十七世紀英文学会東北支部例会、2016 年 1 月 30 日、秋田大学

②[シンポジウム]古河美喜子（司会・パネリスト）、土井雅之（パネリスト）、中村隆（パネリスト）、吉田季実子（パネリスト）、 第一部門『オリジナルとアダプテーション』、「ヘリックと『カルペ・ディエム』の詩想」、日本英文学会 東北支部第 69 回大会、2014 年 11 月 30 日、弘前大学

③[講演とワークショップ]荻野富士夫（講演）、高橋秀晴（司会・コーディネーター・パネリスト）、古河美喜子（パネリスト）、加賀谷真澄（パネリスト）、『生誕 110 年・没後 80 年／小林多喜二の国際性』、「ロバート・ヘリックと小林多喜二—王党派詩人と革命作家の政治性と芸術性—」、日本比較文学会 2013 年度東北大会、2013 年 11 月 30 日、カレッジプラザ

④[ワークショップ]相沢直樹（基調報告）、伊藤豊（司会・コーディネーター）、古河美喜子（パネリスト）、森岡卓司（パネリスト）『「ゴンドラの唄」の比較文学』、日本比較文学会東北支部第 11 回比較文学研究会、2013 年 7 月 27 日、仙台ビジネスホテル

⑤[研究発表]古河美喜子、「ヘリックのカントリー・ハウス・ポエム」、十七世紀英文学会 第２回全国大会、2013 年 5 月 24 日、仙台ガーデンパレス

⑥[研究発表]古河美喜子、「ヘリックのカントリー・ハウス・ポエム」、十七世紀英文

学会東北支部例会、2012 年 7 月 21 日、東北学院大学サテライトステーション

〔図書〕（計　1　件）

①古河美喜子、太田雅孝、佐々木和貴、生田省悟、柴田尚子、友田奈津子、小林七実、松本舞、齊藤美和、岡村眞紀子、植月惠一郎、吉村伸夫、金星堂、十七世紀英文学会編『十七世紀における終わりと始まり』、「ヘリックのカントリー・ハウス・ポエム」、2013、238（97-113）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
古河 美喜子（FURUKAWA, Mikiko）
秋田工業高等専門学校・人文科学系・講師
研究者番号：80462125

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：